大学生の仮想的有能感が援助要請スタイルに与える影響[1]

岡本祐子・新田　啓

Effect of assumed-competence of college students on help-seeking style

Yuko Okamoto and Kei Nitta

Seeking help when necessary can be an appropriate problem-solving strategy. However, dependent help-seeking may cause interpersonal problems, and a consistent failure to ask for help may impair problem-solving. In addition, an individual’s self-esteem and evaluation of the ability of others may influence help-seeking style. Thus, in the current study, we investigated the relationship between assumed-competence and help-seeking style, using the scale of help-seeking style (Nagai, 2013). A questionnaire survey was conducted with college students at national universities. Data for 282 respondents were analyzed. Hierarchical multiple regression analysis was used to identify individuals with a low assumed-competence adaptive style of help-seeking, and individuals with a high assumed-competence positive relation with help-seeking avoidance style. Individuals categorized as the unsure type also exhibited low self-esteem and assumed-competence. The results revealed that the help-seeking style of the unsure group exhibited a significant correlation with confidence in others. Specifically, we found a significant negative correlation between avoidance style and confidence in others. In contrast, we found a significant positive correlation between dependent style and confidence in others. Therefore, the current results suggested that relatively adaptable individuals tended to exhibit successful help-seeking, whereas unsure individuals were often unable to ask for help.

キーワード：help-seeking, assumed-competence, trust, adolescent

問　題

援助要請

個人が問題や悩みを抱えた場合，他者の力を借りて解決を試みることは，様々な場面で見られる

[1] 本稿は第二著者である新田啓の卒業論文を加筆修正したものである。本誌の投稿資格の関係で主任指導教員が筆頭著者となって公刊する。

行動である。このように個人が問題を抱え，自力で解決することが難しいとき，必要に応じて他者に援助を求めることは援助要請 (help-seeking) と呼ばれる。

特に，悩みの相談に注目した援助要請研究では，援助要請行動の頻度，援助要請の意思決定の程度である援助要請意図，援助することへの期待・不安・イメージをとらえる援助要請態度，援助要請意図と態度を包括する認知的枠組みとして捉えられる被援助志向性などの援助要請行動の実行に付随する要因とそれらに影響を与える内的・外的要因の関連を説明することを目的にしているものが多い。そして，それらの研究の多くは，援助要請行動が個人の適応にとって望ましいものであると想定しているため，援助要請を行うか行わないかの二極的な単一次元の尺度で測定された値の高低のみが問題とされている先行研究がほとんどである (永井, 2016)。

援助要請の実行までのプロセスによる分類

しかし，援助要請を測定する場合，その質についても考慮する必要がある。なぜなら，援助要請行動が不適切な頻度で行われることや，問題と自分の能力との査定が適当でないまま援助要請の意思決定を行うことは，問題への不適応的な対処となってしまう可能性が考えられるからである。質問紙調査によって，渡部・永井・桑原 (2014) は，援助要請意図はストレス反応に直接の影響を与えていないことを報告しており，脇本 (2008) も被援助志向性が実際の援助要請行動の回数に関連が見られないことを示している。このことから単一次元の尺度で測定される援助要請の意思決定に関わる要因の高低のみでは，実行される援助要請行動を予測することが困難である。よって，必要な援助要請と不必要な援助要請を弁別することを目的に，永井 (2013) は，援助要請の実行に至るまでの過程に注目し，援助要請をスタイルで分けて考えることを提案している。永井 (2013) は援助要請スタイル尺度を作成し，困難を抱えても自身での問題解決を試み，どうしても解決が困難な場合に援助を要請する傾向を持つ“援助要請自立型”，問題が深刻でなく，本来なら自分自身で取り組むことが可能でも，安易に援助を要請する傾向を持つ“援助要請過剰型”，問題の程度にかかわらず，一貫して援助を要請しない傾向を持つ“援助要請回避型”の 3 つのスタイルに分類した。そして，これらのスタイルは過去 4 週間の悩みの経験，及び援助要請行動との関連から実際の行動パターンと一致することが実証されている。援助要請スタイル尺度はスタイルの分類だけではなく，そのスタイルをどの程度志向するかという傾向を測定する尺度として扱うこともあり (永井, 2016)，本研究はそれに倣うものとする。

援助要請資源

援助要請の受け手となる援助者はフォーマルな援助資源となる専門家とインフォーマルな援助資源となる友人や家族等に分けることができる。大学生における主な援助要請の対象者は友人となっており，学生相談など専門家への援助はあまり求めないこと (與久田・太田・高木, 2011) 友人への被援助志向性は悩みの種類に関係なく，専門家への志向性より有意に高いことが示されている (木村・水野, 2004)。また，木村・梅垣・水野 (2014) は抑うつと自殺念慮のシナリオを提示した後，そのような状況に陥ったときに，援助要請の意図があるかどうかや実際に援助要請行動に移すかどう

かを尋ねた実験の結果，友人や家族に援助を求めようと考える学生は両ケースとも 7 割を超えたが，専門家への援助を考える割合は抑うつシナリオで 14.6%，自殺念慮シナリオで 21.2%と低い水準にとどまっている。フォーマルな援助資源とインフォーマルな援助資源では，与えられる援助の性質が異なる。しかし，対人関係や学業，進路選択などのストレスフルなライフイベントを経験することが予想される大学生 (高比良，1998) において，フォーマルな援助資源よりアクセスしやすい，インフォーマルな援助資源ですら利用を見送ることは将来的なリスクを生じるため，本研究ではインフォーマルな援助資源を利用することを求める援助要請について扱う。

援助要請と自尊感情

援助要請行動は自尊感情との関連を調査した研究が多く，特に 2 つの仮説に対する検討が多く行われている。永井 (2010) によると，仮説の 1 つは,自尊感情の高い人ほど，その状態を維持するために援助要請を行わないようにする認知的一貫性仮説，もう一つは自尊感情の低い人は，そのわずかな自尊感情がさらに低下することを恐れるため援助要請を行わないとする傷つきやすさ仮説であることを述べている。しかし，本邦での検討では，援助要請と自尊感情に正の関連を報告するものが多いものの，いずれの研究も関連は弱く (e.g.木村・水野, 2004：永井, 2010) 関連が示されなかった研究 (水野・石隈・田村, 2006) も存在する。

これらの理由として，援助要請は自尊感情の高低のみでは説明ができないことが考えられる。脇本 (2008) は，日誌法を用い，自尊感情の不安定性を測定することで，援助要請行動と自尊感情の関連を説明することを試みている。不安定性とは，短期間での自尊感情の変動のしやすさであり，高い不安定性は自己防衛反応の示しやすさとの関連が指摘されている。援助要請行動に対し自尊感情の不安定性の主効果は見られなかったが，自尊感情の高低と自尊感情の変動性には交互作用が見られ，高自尊・不安定群は高自尊・安定群より被援助志向性が低いなどの結果が示された。また，福沢・山口・先崎 (2013)によると，自尊心が高く，自尊心が不安定な者は不適応な性質に結び付くとされていることが知見として示されている。このように，援助要請行動を導く要因として，自尊心を取り上げる場合には，その他の個人特性の影響を考慮に入れることが重要であると考えられる。

仮想的有能感

現代の若者像をとらえる概念として，速水・木野・高木 (2004) によって提唱された“仮想的有能感”が挙げられる。 仮想的有能感とは，「自己の直接的なポジティブ経験に関係なく，他者の能力を批判的に評価・軽視する傾向に付随して習慣的に生じる有能さの感覚」と定義されている(速水他, 2004)。仮想的有能感は Hayamizu, Kino, Takagi & Tan (2004)によって作成された Assumed Competence Scale second version 2 (以降 ACS-2)によって測定される。仮想的有能感そのものは無意識的なものであり，直接ではとらえにくいため“他者軽視”の傾向を測定し，他者軽視の強さに対応するものとして仮想的有能感が存在すると考えられている (速水, 2012)。また，他者を低く評価していても，自身の有能さの感覚がポジティブ経験の豊富さによるものであれば，仮想的有能感の定義とそぐわない。この問題を解消するために, ACS-2 と自尊感情尺度を併用し，有能感を 4 分類することが提案さ

れている。他者軽視と自尊感情の高低の組み合わせによって，他者軽視も自尊感情も高い場合は全能型,他者軽視の傾向が高く自尊感情が低い場合が仮想型，他者軽視が低く自尊感情が高い場合は自尊型，他者軽視と自尊感情がともに低い場合は萎縮型となる (Figure 1)。全能型は実際に自分に自信があるため他者を軽視しがちであると考えられ，仮想型は他者軽視を行うことによって根拠のない有能感を得ていると考えられる。また自尊型は自尊感情が高くても他者軽視を行わない人々であり，萎縮型は自らに自信がないように見える人々である。

仮想的有能感と援助要請の関連として，橋本 (2013) によれば，他者軽視傾向が高いほど友人や家族への援助要請意図は低くなることが示された。しかし，専門家への援助要請意図は他者軽視と自尊感情の交互作用が見られ， 他者観が肯定的であれば自尊感情の低さが援助要請を抑制し，他者観が否定的であれば自尊感情の高さが援助要請を抑制するという結果となった。このことは専門家への援助要請を行うことに抵抗がないのは自尊感情が高く他者観も肯定的という比較的健康な人々であることを示唆している。

また，仮想的有能感と自尊心の変動性の関連の可能性として，速水 (2012) は他者軽視が自尊感情の不安定性から引き起こされることを述べている。つまり，仮想的有能感が高い者は，様々なイベントに対して自尊感情が揺らぎやすいため，他者軽視を行い，自尊感情を高め，維持しようとしていると考えられる。また，仮想的有能感が高い者は他者を軽視しているが，それは他者に注意が向いているからであって，他者に対する注意の多さが自尊感情を不安定にしているとも考えられる。つまり，仮想的有能感 (他者軽視) の高い人々は，揺らぎやすい自尊感情を維持するため，他者に自身の弱さを暴露することを拒む“援助要請回避型”の傾向が高くなると考えられる。また，仮想的有能感が低く比較的適応的な自立型の人々は，適切な援助要請を行うことができると考えられるため“援助要請自立型”の傾向が高くなると考えられる。

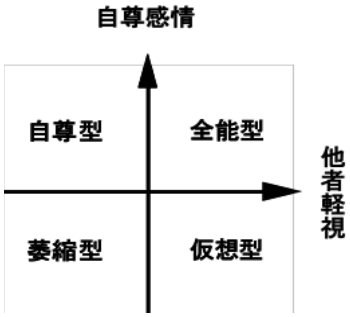

Figure 1. 有能感の 4 タイプ (速水, 2012)。

援助要請と信頼感

一方，仮想的有能感も自尊心も低い人々 (萎縮型) は，自信の無さに影響され回避的な援助要請スタイルをとるのか，それとも，自己の能力より他者の能力を頼りにし，繰り返し援助要請を求めてしまうのか，仮想的有能感の概念のみでは説明することが難しい。この場合，援助資源である他

者への信頼感によって，取りうる援助要請スタイルが異なるのではないかと考えた。天貝 (1995) によると信頼感とは，自分あるいは他人に対して抱く信頼できるという気持ちであり， 自分自身の能力や他人の存在の一貫性についての確信である。また，安定した信頼感を持つ場合，他者をより支持的であると感じると述べている。よって，萎縮型の人々は，他者への信頼感が高いと援助要請を行いやすいと感じるのではないかと考えられる。

目　的

以上の問題点から本研究は，援助要請スタイルが仮想的有能感および信頼感によって説明されることを実証することを目的とした。本研究で扱う援助要請とは，援助要請スタイルの定義より「個人が問題を抱えた場合に他者に対して，自身の意思で相談を行うこと」とする。援助要請をスタイルの観点から捉えなおすことは，不適応的な援助要請行動を行う傾向を持つ個人への介入や援助に対する知見を提供すると考えられる。

よって，本研究では質問紙調査を行い，(a) 仮想的有能感 (他者軽視) の高い人々は，回避的な援助要請を行うこと，(b) 他者軽視が低く，自尊感情が高い自尊型の人々は自立的な援助要請を行うこと，(c) 他者軽視も自尊感情も低い萎縮型の人々は，他者への信頼感が高い場合に，適切な援助要請行い，他者への信頼感が低ければ，回避的な援助要請を行うことを検証する。

方　法

対象者

国立大学の大学生 307 名を対象とし，質問紙を配布した。そのうち，欠損のあるデータを除く，282 名 (男性 138 名，女性 144 名；平均年齢 20.61 歳, SD=.81) を分析対象者とした。

手続き

調査は 2017 年 11 月から 12 月にかけて行われた。大学の講義後，対象者に一斉に質問紙を配布しその場で回収した。その際，調査は無記名式であり回答は任意であること，いつでも回答を中断できること，調査協力を拒否しても不利益が生じないことなどを口頭で伝えた。

質問紙の構成　①援助要請スタイル尺度。永井 (2013) が作成した援助要請スタイル尺度を用いた。この尺度は下位因子である“援助要請自立型”，“援助要請過剰型”，“援助要請回避型”，それぞれ 4 項目ずつ，全 12 項目で構成されている。悩みや問題を抱えた場合の自分にどの程度あてはまるか，7 件法で回答を求めた。永井 (2013) や青柳 (2016) では，援助要請スタイルによる分類にこの尺度を用いており，ある下位因子の得点の合計が得点範囲の中央値以上で，かつ他の 2 つの下位因子得点より高い者をその下位因子群としていたが，本研究ではそのような分類を行わず，永井 (2016) に倣い，この尺度を援助要請スタイルの程度・傾向を測定するために用いた。②他者軽視 Hayamizu et al　(2004) で作成された ACS-2 を用いた。世間一般の他者，もしくは，より身近な経験

の中での他者を想定した「自分の周りには気のきかない人が多い」,「他の人の仕事を見ていると，手際が悪いと感じる」,「話し合いの場で，無意味な発言をする人が多い」,「知識や教養がないのに偉そうにしている人が多い」等の 11 項目の質問に 5 件法で回答を求めた。得点が高いほど，他者軽視の傾向が高いことを示す。③自尊感情尺度　山本・松井・山成 (1982) によって邦訳された Rosenberg (1965) の自尊感情尺度を用いた。全 11 項目を 5 件法で回答を求めた。なお，②の ACS-2 と③の自尊感情尺度を用いて有能感の 4 タイプに分類する基準はそれぞれの得点の平均値とした。④信頼感尺度 天貝 (1995) で作成された信頼感尺度を用いた。全 24 項目で構成され, 6 件法で回答を求めた。3 因子構造で下位因子に，“不信”,“自分への信頼”,“他人への信頼”が確認されている。⑤フェイス項目。年齢と性別の記入を求めた。

結　果

分析には，HAD Version16.03 (清水, 2016) を使用した。

援助要請スタイル尺度の因子分析

援助要請スタイル尺度について，3 因子構造となることを確かめるため確認的因子分析を行った。その結果，適合度が低かったため (CFI＝.88, RMSEA=.12, GFI=.86, AGFI=.79) 探索的因子分析を行った。対角 SMC と MAP 平行分析の結果から因子数を 3 に設定した上で，最尤法，プロマックス回転を用いた。その結果得られた因子パターンを Table 1 に示す。各因子は先行研究 (永井, 2013；青柳, 2016) で想定されている項目でまとまったため，第 1 因子を“援助要請過剰傾向”，第 2 因子を“援助要請回避傾向”，第 3 因子を“援助要請自立傾向”と命名した (以降それぞれ“過剰傾向”“回避傾向”“自立傾向”と呼ぶ)。α 係数は順に.90, .86, .76 であったことから，十分な内的整合性が確認された。各下位因子項目の平均値を尺度得点とした。

信頼感尺度の因子分析

信頼感尺度について, 3 因子構造となることを確かめるために確認的因子分析を行った。その結果から，因子負荷量が.40 以下であった項目 6, 13, 24 を削除し，再度因子分析を行った。しかし，モデルの適合度は低いままであったため (CFI＝.88, RMSEA=.08, GFI=.86, AGFI=.82), 探索的因子分析を行った。対角 SMC と MAP 平行分析の結果から因子数を 3 に設定した上で，最尤法，プロマックス回転を用いた。その結果，共通性が.16 を下回った項目 6 と 13 を削除し，再度最尤法，プロマックス回転で探索的因子分析を行った。そして，得られた因子パターンを Table 2 に示す。Factor1 及び Factor2 は天貝 (1995) で示された因子パターンとは異なるが，天貝 (1997) では，参加者の年代によって項目が因子間を移動することが報告されており，またそれぞれの因子の構造上の定義と項目の意図に祖語は見られなかったため, Factor1 を“他者に対する信頼”, Factor2 を“自身に対する信頼”, Factor3 を“不信”と命名した。

Table 1

援助要請スタイル尺度の因子構造

	Factor1	Factor2	Factor3	共通性
援助要請過剰傾向 (α=.90, ω=.91)				
悩みを抱えたら,それがあまり深刻なものでなくても,相談する	**.905**	.032	-.040	.790
比較的ささいな悩みでも,相談する	**.882**	.056	-.017	.721
困ったことがあったら,割とすぐ相談する	**.795**	-.052	.063	.686
よく考えれば大したことないと思えるようなことでも,割りと相談する	**.780**	-.030	-.014	.641
援助要請回避傾向 (α=.86, ω=.86)				
悩みが自分では解決できないようなものでも,相談しない	.116	**.865**	.014	.627
悩みがどのようなものでも,最後まで自分一人でがんばる	.042	**.796**	.103	.561
悩みは最後まで,自分一人で抱える	-.064	**.725**	-.068	.618
悩みが深刻で,一人で解決できなくても,相談はしない	-.145	**.700**	.022	.632
援助要請自立傾向 (α=.76, ω=80)				
相談より先に自分で試行錯誤し,いきづまったら相談する	-.104	.063	**.814**	.670
先に自分で,いろいろとやってみてから相談する	-.220	.077	**.697**	.554
少しつらくても,自分で悩みに向き合い,それでも無理だったら相談する	.221	.014	**.642**	.436
悩みが自分一人の力ではどうしようもなかった時は,相談する	.141	-.299	**.528**	.513
因子間相関 Factor2	-.651			
Factor3	-.052	-.253		

Table 2

信頼感尺度の因子構造

項目	Factor1	Factor2	Factor3	共通性
他者に対する信頼 (α=.83, ω=.83)				
一般的に,人間は信頼できるものだと思う。	**.740**	-.001	-.054	.592
状況が許せば,たいてい人間はお互い正直に,かつ誠実にかかわりあいたいと思っている	**.690**	-.054	.112	.360
これまでに出会ったほとんどの人は私によくしてくれた。	**.652**	-.150	-.045	.333
無理をしなくてもこの先の人生でも,私は信頼できる人と出会えるような気がする。	**.599**	.287	.114	.606
私は私で,決して他人にはとってかわることのできない存在であると思う。	**.572**	.203	.134	.452
これまでの経験から,他人もある程度は信頼できると感じる。	**.523**	.065	-.251	.543
私は現実に信頼できる特定の他人がいる。	**.349**	.202	.012	.259
自身に対する信頼 (α=.81, ω=.81)				
私は,自分自身を,ある程度は信頼できる。	-.029	**.821**	.001	.639
私は,自分自身が,信頼に値する人間だと思う。	.017	**.716**	-.102	.603
周りのほとんどの人は私を信頼してくれているだろう。	-.094	**.614**	-.056	.328
私は自分の人生に対し,何とかやっていけそうな気がする。	.077	**.579**	.075	.370
私は,自分自身の行動をある程度はコントロールすることができるという確信をもってい	-.102	**.564**	.158	.214
私は多少のことがあっても,今の信頼関係を保っていけると思う。	.257	**.468**	-.187	.617
自分自身について,今は実現していないことでも,いつかこうなるだろうと信じられるこ	.030	**.427**	.002	.201
不信 (α=.85, ω=.86)				
今心から頼れる人にもいつか裏切られるかもしれないと思う	.157	-.010	**.819**	.564
今は何かと話せても,他人など全く当てにならないものである。	-.164	.083	**.735**	.633
所詮 (しょせん),周りは敵ばかりだと感じる。	-.113	-.035	**.735**	.669
過去に,誰かに裏切られたりだまされたりしたので,信じるのが怖くなっている。	.069	.085	**.732**	.451
自分で自分をしっかり守っていないと,壊れてしまいそうな気がする。	.287	-.066	**.723**	.400
私はなぜか人に対して疑り深くなってしまう。	-.040	-.096	**.528**	.359
気をつけていないと,人は私の弱みにつけ込もうとするだろう。	-.121	.074	**.446**	.236
相手が自分を大切にしてくれるのは,そうすることによって相手に利益があるときだ。	-.245	.109	**.441**	.303
因子間相関 Facter2	.728			
Facter3	-.532	-.410		

性別，援助要請スタイル，他者軽視，自尊感情，信頼感の関連

まず，性別を独立変数とし，援助要請スタイル (過剰・回避・自立傾向) を従属変数とした，対応のない *t* 検定を行った。その結果，過剰傾向は女性の方が男性より有意に高く (t=5.33, df=280, p< .01)，回避傾向は男性の方が女性より有意に高いこと (t=3.20, df=280, p< .05) が示された。自立傾

向には有意な性差は見られなかった (t=.17, df=280, p=.86)。

次に，全分析対象者のデータを用いて各尺度得点の相関分析を行った。結果を Table 3 に示す。援助要請スタイルと仮想的有能感の関連については，過剰傾向と他者軽視の間に有意な負の相関が (r= -.21, p< .01) 示された。回避傾向と他者軽視では，正の相関が有意 (r= .24, p< .01) であり，さらに回避傾向は自尊感情と有意な負の相関が (r= -.13, p< .05) 示された。また，援助要請スタイルと信頼感との関連では，過剰傾向と他者に対する信頼で正の相関が有意 (r= .25, p< .01) であり，不信とは負の相関が有意に (r= .-16, p< .01) 示された。自立傾向は他者に対する信頼と正の相関が有意に (r= .22, p< .01) 示され。回避傾向は他者に対する信頼と有意な負の相関が (r= -.33, p< .01)，不信とは正の相関 (r= .389, p< .01)が示された。加えて、他者軽視と自尊感情には有意な相関は認められなかったため，仮想的有能感の 4 類型に分類しての分析が可能である。

Table 3

援助要請スタイル，他者軽視，自尊感情，信頼感の相関

	1	2	3	4	5	6	7	8
1. 援助要請過剰傾向	1.00							
2. 援助要請回避傾向	-0.57 **	1.00						
3. 援助要請自立傾向	0.00	-0.25 **	1.00					
4. 他者軽視	-0.20 **	0.24 **	-0.05	1.00				
5. 自尊感情	-0.05	-0.13 *	0.06	0.08	1.00			
6. 他者に対する信頼感	0.25 **	-0.32 **	0.22 **	-0.30 **	0.34 **	1.00		
7. 自身にむけられる信頼感	0.14 *	-0.26 **	0.28 **	-0.07	0.56 **	0.67 **	1.00	
8. 不信	-0.16 **	0.39 **	-0.02	0.40 **	-0.39 **	-0.45 **	-0.35 **	1.00

** p < .01, * p < .05

他者軽視と自尊感情の交互作用の検討

自尊感情と他者軽視の相対的影響および交互作用について検討するため，それらの中心化得点を説明変数，援助要請スタイルの各下位尺度得点を目的変数とした階層的重回帰分析を行った。まず，Step1 に主効果の検討として自尊感情と他者軽視の中心化得点を投入した。次に， Step2 に自尊感情と他者軽視の交互作用項を投入した。結果を Table 4 に示す。

目的変数に過剰傾向を設定し，自尊感情と他者軽視の影響を検討した。他者軽視の主効果のみが有意であり (β= -.43, p< .01)，他者軽視の傾向が高いほど過剰な援助要請を行わない傾向にあることが示された。

目的変数に回避傾向を設定した場合，他者軽視 (β= .52, p< .01) と自尊感情(β= -.32, p＜.01) の効果がどちらも有意であり，他者軽視の傾向が高いほど回避傾向が高く，自尊感情が高いほど回避的な行動をとる傾向にあることが示された。

最後に，目的変数に自立傾向を設定し，自尊感情と他者軽視の影響を検討した。交互作用のみが有意であったため (β= -.30, p< .05)，単純傾斜の検定を行った。その結果，自尊感情が高い場合において，他者軽視と自立傾向に負の関連が認められた (β= -.19, t= -2.39, p＜.05)。交互作用のパターンを Figure 2 に示す。

Table 4

交互作用項を含めた階層的重回帰分析の結果

	β			R^2
	他者軽視	自尊感情	交互作用	
自立傾向	-.110	.128	-.295 *	.028 *
過剰傾向	-.431 **	-.046	-.179	.048 **
回避傾向	.523 **	-.316 **	.232	.088 **

$^{**}p < .01$, $^{*}p < .05$, $^{+}p < .10$

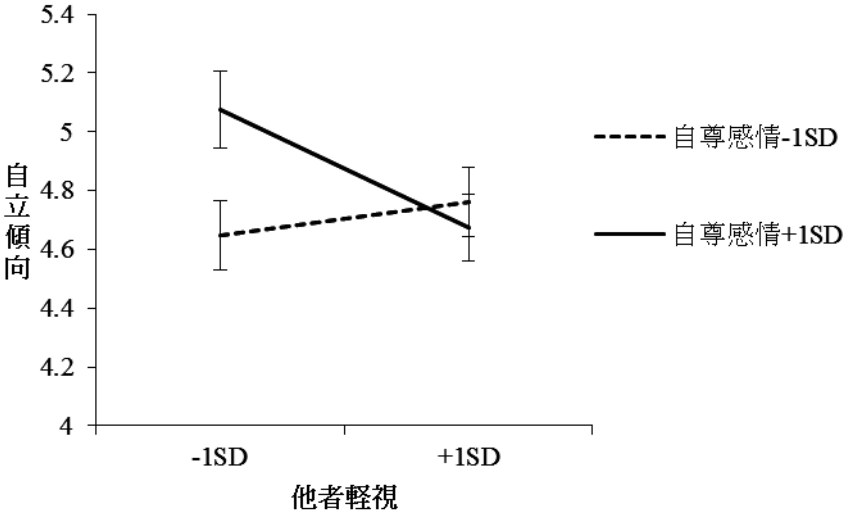

Figure 2. 他者軽視と自尊感情の自立傾向に対しての交互作用(エラーバーは標準誤差)

萎縮型の援助要請スタイルと信頼感の関連

階層的重回帰分析の結果から他者軽視は過剰傾向とも回避傾向とも関連が示された。萎縮型の援助要請スタイルについての仮説の検証のため，自尊感情得点と他者軽視得点のどちらともが平均以下であった対象者を萎縮型群 (n=68) とし，分析を行った。結果は Table 5 に示した。信頼感尺度の下位因子得点と援助要請スタイル尺度の相関分析を行ったところ，過剰傾向と他者に対する信頼に，有意な正の相関 (r= .34, p< .01) が示された。また，回避傾向と他者に対する信頼感には，負の相関が (r= -.40, p< .01)，不信には，有意な正の相関が認められた (r= .50, p< .01)。自立傾向と信頼感とには，有意な相関は示されなかった。

Table 5

萎縮型 (n=68) の援助要請スタイルと信頼感の相関

	1	2	3	4	5	6
1.他者に対する信頼	1.000					
2.自身に対する信頼	.501 **	1.000				
3.不信	-.355 **	-.134	1.000			
4.援助要請過剰傾向	.340 **	.281 *	-.211 +	1.000		
5.援助要請回避傾向	-.397 **	-.236 +	.503 **	-.666 **	1.000	
6.援助要請自立傾向	.061	.172	.164	-.054	-.011	1.000

** $p < .01$, * $p < .05$, + $p < .10$

考　察

援助要請スタイル得点に性差がみられるか検討したところ，回避傾向と過剰傾向に有意な差が示された。それぞれの得点が，回避傾向においては，男性の方が女性より高く，過剰傾向においては，女性の方が高かった。これは感情を表出することや弱みを他者に見せること，他者に依存することを良しとしない伝統的性役割観が，援助要請の持つ性質に合致するものではないことが考えられている (Sears, Graham & Campbell, 2009)。男性は，自身の能力では解決が困難な悩みや問題が存在することを他者に伝えることになる援助要請を回避し，さらに過剰に他者に頼らないという選択を習慣的に行っていると推察される。

相関分析からは，他者軽視の傾向が高いほど回避傾向が高くなり，逆に過剰傾向は低くなることが示された。橋本 (2013) の結果を支持するものであり，他者軽視は援助要請の生起を抑制していると推察される。

加えて，自尊感情と他者軽視の交互作用を検討するために，階層的重回帰分析を行ったところ，自立傾向に対して，他者軽視と自尊感情の交互作用が示された。さらに，自尊感情高群において他者軽視と自立傾向に負の関連が示された。このことから，自尊感情が高く，他者軽視も高い，“全能型”の有能感タイプの人々は自立的な援助要請を行わない傾向が強い。一方，自尊感情が高く，他者軽視が低い，“自尊型”の人々は仮説通り，自立的な援助要請を実行しやすいことが推察される。また，回避傾向は他者軽視と正の関連を持ち，過剰型は他者軽視と負の関連が認められた。他者軽視の側面を持つ人々は，援助要請をすることに回避的であり，他者を頼ることに対する困難さを抱えている可能性が示唆された。

萎縮型群の尺度得点を用いて相関分析から，萎縮型の援助要請が，信頼感の影響で変動するという仮説は一部支持されなかった。結果から，援助要請過剰傾向と他者に対する信頼感とで有意な正の相関が示され，援助要請回避傾向と他者に対する信頼に負の相関がみられた。このことは，他者に対する信頼感が萎縮型の個人において，援助要請スタイルの選択と重要な関係を持つことを示唆している。つまり，萎縮型の援助要請は，他者に対しての信頼感によって，援助要請スタイルの様相は大きく異なるが，いずれにしても適切な援助要請スタイルではない。そして，その結果，不適応的

な問題対処につながる可能性が推察される。

さらに，援助要請回避傾向と不信に正の相関が示された。不信因子の項目には，「今心から頼れる人にもいつか裏切られるかもしれないと思う」や「今は何かと話せても，他人など全く当てにならないものである」などが含まれており，援助要請が回避的になってしまうのは，援助要請を行うことによって対人関係での不利益を被ることを想定するか，または過去に援助を要請した結果，裏切りやだまされた体験をしたことによって不信感が高まり，援助要請をしにくい状況に陥っていることが予測される。

本研究は，大学生における仮想的有能感が，援助要請スタイルに与える影響を検討した。今後は，これらの援助要請スタイルが実際の精神的健康と関連があるかを確かめる必要がある。また，対象者が大学生であるため，般化可能性を検証するためにより広範な年代に対して調査すること，援助資源の利用可能性や所属集団の性質などの環境要因を加えた検討が考えられる。さらに，より操作的な研究手法を用いて，因果関係について検討することによって，援助要請スタイルを獲得するプロセスを明らかにし，より有効な介入に役立てることが可能になるだろう。

引用文献

天貝由美子 (1995). 高校生の自我同一性に及ぼす信頼感の影響　教育心理学研究, *43*, 364-371.

天貝由美子 (1997). 成人期から老年期に渡る信頼感の発達　教育心理学研究, *45*, 79-86.

青柳茉美 (2016). 大学生の信頼感と援助要請スタイル別ソーシャルサポートとの関連性　九州大学心理学研究, *17*, 63-68.

橋本　剛 (2013). 援助要請と仮想的有能感の関連―援助要請を抑制するのは自尊感情か，他者軽視か―　日本心理学会第 77 回大会発表論文集, 153.

福沢　愛・山口　勧・先崎沙和 (2013). 自尊心のレベル・変動性と将来への肯定的な期待との関連―遠い将来への肯定的な期待が持つ脅威軽減機能について　パーソナリティ研究, *22*, 117-130.

速水敏彦 (編) (2012). 仮想的有能感の心理学―他人を見下す若者を検証する―　北大路書房

速水敏彦・木野和代・高木邦子 (2004). 仮想的有能感の構成概念妥当性の検討　名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要, *51*, 1–7.

Hayamizu, T., Kino, K., Takagi, K., & Tan, E. H. (2004). Assumed-competence based on undervaluing others as a determination of emotions: Focusing on anger and sadness. *Asia Pacific Education Review*, *5*, 127–135.

木村真人・梅垣佑介・水野治久 (2014). 学生相談機関に対する大学生の援助要請行動のプロセスとその関連要因―抑うつと自殺念慮の問題に焦点をあてて―　教育心理学研究, *62*, 173-186.

木村真人・水野治久 (2004). 大学生の被援助志向性と心理的変数との関連について―学生相談・友達・家族に焦点をあてて カウンセリング研究, *37*, 260-269.

水野治久・石隈利紀・田村修一 (2006).　中学生を取り巻くヘルパーに対する被援助志向性に関する研究―学校心理学の視点から―　カウンセリング研究, *39*, 17-27.

永井暁行 (2016). 大学生の友人関係における援助要請およびソーシャル・サポートと学校適応の関連　教育心理学研究, *64*, 199-211.

永井　智 (2010). 大学生における援助要請意図―主要な要因間の関連から見た援助要請意図の規定因―　教育心理学研究, *58*, 46-56.

永井　智 (2013). 援助要請スタイル尺度の作成―縦断調査による実際の援助要請行動との関連から―　教育心理学研究, *61*, 44-55.

Sears, H. A., Graham, J., & Campbell, A. (2009). Adolescent boys' intentions of seeking help from male friends and female friends. *Journal of Applied Developmental Psychology*, *30*, 738-748.

清水裕士 (2016). フリーの統計分析ソフト HAD : 機能の紹介と統計学習・教育，研究実践における利用方法の提案　メディア・情報・コミュニケーション研究, *1*, 59-73.

高比良美詠子 (1998). 対人・達成領域別ライフイベント尺度 (大学生用) の作成と妥当性の検討 社会心理学研究, *14*, 12-24.

脇本竜太郎 (2008). 自尊心の高低と不安定性が被援助志向性・援助要請に及ぼす影響　実験社会心理学研究, *47*, 160-168.

渡部雪子・永井　智・桑原千明 (2014). 大学生における援助要請の方法と適応との関連の検討　立正大学心理学研究年報, *5*, 47-53.

山本真理子・松井　豊・山成由紀子 (1982). 認知された自己の諸側面の構造　教育心理学研究, *30*, 64-68.

與久田巌・太田　仁・高木　修 (2011). 女子大学生の援助要請行動の領域、対象、頻度と大学生活不安および社会的スキルとの関連　関西大学社会学部紀要, *42*, 105-116.